

論文審査の結果の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（看護学）	氏名	加藤 陽子
学位授与の条件	学位規則第4条第①2項該当		
論文題目			
<p>Development of an assessment tool for the transition of Japanese primiparas becoming mothers: Reliability and validity                  （日本人初産婦が親になっていく移行のアセスメントツールの開発：信頼性と妥当性）</p>			
論文審査担当者			
主査	教授	新福 洋子	印
審査委員	教授	折山 早苗	
審査委員	講師	藤本 紗央里	
〔論文審査の結果の要旨〕			
<p>移行は自己の再定義のいくつかの段階と関連して起こる2つの比較的安定した状態の間の変化の時期とされ，健全に移行が経過すれば主観的な安寧や熟達感を持ち，周囲の人との良い関係性を築けると言われている。母親になっていく移行では，アイデンティティの揺らぎや葛藤が生じることもあるが，移行が健全に経過すると母親としての生活に慣れるという状態に至ることができる。母親としての生活に慣れることで，完璧な母親による完璧な子育てではなく，ほどよい母親によるほどよい子育てを可能とするが，一方で，不完全さが含まれたほどよい状態を良しとはみなさない伝統的母親役割思考によって，移行が阻害されることがある。阻害されないためには，伝統的母親役割思考にとらわれず，移行の経過のなかで起こるほどよい状態に母親が気づけることが大切であることから，移行の状態をとらえることができるアセスメントツールは有用と思われる。しかし，これまでの移行期にある母親をアセスメントする尺度は，母親の心身の状態や子どもとの関係性の良し悪しを測定することを目的としており，母親としての生活に慣れるという状況をとらえることはできなかった。そこで本研究は，母親としての生活に慣れるという認識をとらえることを目指し，日本人初産婦の母親になっていく移行をアセスメントできる尺度を開発し，その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。</p> <p>まず，産後3～6か月の初産婦の母親になっていく移行についての半構造的インタビューを行い，81項目の尺度原案を作成した。尺度原案より項目の検討，項目抽出を行うため，パイロットスタディとしてwebによるアンケート調査を実施した。対象は初産婦86名であり，記述統計，探索的因子分析及び内容妥当性の検討を行った結果，57項目が抽出され，これを本調査で使用する尺度原案とした。本調査は，尺度原案の信頼性及び妥当性の検討を目的とし，webによるアンケート調査を実施した。調査項目は，属性，57項目の尺度原案，併存的妥当性・弁別的妥当性検討における外部基準と</p>			

しての母親役割の自信尺度，母親であることの満足度尺度及び養育意識・行動尺度であった。記述統計を行った後，妥当性の検討として探索的因子分析と確証的因子分析を行い，さらに外部基準と本尺度との相関を評価した。内容妥当性の検証として，因子抽出過程及び抽出した結果について専門家との意見交換を行った。信頼性検討のために Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。

本調査の分析対象は 395 名となった。探索的因子分析を行い共通性のある因子負荷量を算出し，内容妥当性の検討により 5 因子 30 項目（第 I 因子 10 項目，第 II 因子 8 項目，第 III 因子 6 項目，第 IV 因子 3 項目，第 V 因子 3 項目）を抽出した。第 I 因子は自分の子育てへの力不足や自信のなさ，母親としての役割遂行が十分に発揮できていないことに関する項目で構成され「母親役割の不充足感」，第 II 因子は自分にとっての子育てをしている中での子どもの存在，子どもとの生活に関する項目で構成され「私にとっての子育て」，第 III 因子は子どもからの要求の理解や，母親である振る舞いになってきた認識に関する項目で構成され「母親役割遂行の熟達感」，第 IV 因子は夫又はパートナーの父親役割遂行への思いや，親としての関係性に関する項目で構成され「子育てにおけるパートナーとの関係」，第 V 因子は確立した子育てでなく，自分なりの子育てを受容することに関する項目で構成され「自分なりの子育て観の芽生え」と命名した。Cronbach の  $\alpha$  係数は，第 I 因子 0.871，第 II 因子 0.870，第 III 因子 0.751，第 IV 因子 0.767，第 V 因子 0.648 であり，適合度指数は，CFI=0.838，GFI=0.821，AGFI=0.789，RMSEA=0.07 であった。本尺度の合計点と 3 つの各尺度得点との相関は，母親役割の自信尺度で  $r=0.394$ ，母親であることの満足度尺度で  $r=0.569$ ，養育意識・行動尺度で  $r=-0.459$  であった。

Cronbach の  $\alpha$  係数より，本尺度の内的整合性は許容範囲以上であることが示された。また尺度全体は，母親になっていく移行という同一の概念で，各下位因子においても同一概念の項目で構成されており，本尺度の信頼性は検証できた。探索的因子分析における因子負荷量より，妥当な項目で構成される尺度であることが示された。確証的因子分析の結果，GFI>AGFI の基準及び RMSEA の値は当てはまりが悪いとされるものではなく，適合度はやや低い，尺度開発の初段階においては許容できる範囲であった。基準関連妥当性では併存的妥当性および弁別的妥当性が確認でき，本尺度の妥当性が確認された。

本結果から，得点が高いほど母親になっていく移行が進んでいることを示す尺度であることに加えて，第 V 因子の「自分なりの子育て観の芽生え」に着目することで，完璧でないとしても，母親が自分にとってのほどよさを認識できていることを評価する尺度が開発できたといえる。

以上，本論文は，母親にとってほどよいという認識をとらえることができる尺度を開発し，母親になっていく移行を構成する 5 因子から，母親になっていく移行の状態を数値的に示し，経時的な移行の状態ならびに推移を判断可能とする，助産学領域に大きく貢献する研究として高く評価される。

よって審査委員会委員全員は，本論文が著者に博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値あるものと認めた。